

第9回福田徳三研究会
2011年1月24日(月)

「戦争末期から戦後初期の東京商科大学」¹

横浜国立大学名誉教授 本間要一郎

(大月康弘) 今日はお寒いなか有難うございます。私たちは、学園史の編纂と絡めて、一橋大学の歴史を改めて勉強しようとしています。学園創成期以来の先達の活躍を、学園史を一方の基軸にして、他方で、この大学を卒業された方々がわが国でなされた事績を検証しようと考えています。大学が持っている種々の生資料を活用して、これまでの研究蓄積に新たな知見を加えられればという次第です。そこで、今日は、本間先生から、先生がご在学であった昭和10年代後半から20年代にかけての、当時の東京商科大学における学問の状況や雰囲気についてお話を承りたいと思います。よろしく願いいたします。

(本間) ところがあとでお話しますが、その学問の歴史が僕らの年代ではまことに貧弱なんです。学園史ということなら、これまでもいろいろまとめたものがたくさんあるじゃないですか。

(大月) そうですね。ただ、いろいろなお話の中で、まだ死角といいますか、新しい新史というものもあるのかな、と考えておりました。

(本間) この前、水田〔洋〕さんがお見えになって昭和10年代の話をされて、そのとき私によろしくと伝言があったという葉書を、金沢幾子さんからいただきました。その返事の葉書に、昭和10年代といっても水田さんのころの前半とその後半ではまるっきり違うんだということを書いたのがこちらへ回ったらしくて(笑)。それでこの会になったようですね。渡辺〔雅男〕さんの話では、まったく気軽に質疑応答みたいな形でいいということでしたので、特別の準備はしておりませんが、いろいろご質問があればお答えします。

はじめにお断りしておきますと、私が予科に入学したのは昭和17年4月ですが、その前年に予科の修業年限が半年短縮されて、本科に進んだのは昭和19年9月、そして昭和22年9月卒業ということなので、実際に知っているのはその間のことなんですがね。ここに年表²がありますのでご質問の参考にしてください。これは私たちの予科入学60周年を記念して作った文集に挟み込んだ年表で、直接間接に僕らのクラスに関係のある事項を拾っていますから、決して十分ものではないんですが。

¹ 発言者は発言の順に、大月康弘、渡辺雅男、西沢保、杉岳志、江夏由樹。

² 末尾の「配布資料」を参照のこと。

(本間) 皆さん戦後生まれの方ばかりですね。

(渡辺雅男) 私は1969年入学です。昭和44年の大学紛争の時代です。ただ戦前のそういうお話をしてくださる方が、まだいっぱいいらっしゃったから、私なんかは耳学問ができていますけど。

(本間) 私が入学したときの予科長は堀潮という教授で、学生の間ではホリチョウとよんでいましたが。その教授が「イギリス産業革命史」という講義も担当していました。実際の講義は、商法講習所のころから始まって、籠城事件から白票事件と、要するに一橋学園史なんです。年間の講義の半分はそれで終わりです。これはずいぶん変わった大学だなという感じでしたね。話の中身が変わっているというのじゃなく、そういうことを新入生に対して最初に講義するなんていう大学はあまりないんじゃないかと。

(渡辺) 最近はまだ新たな動きとして、本学を含むいくつかの大学では、そのような講座を作って学生に聞かせるという試みもあります。

(本間) 最近、大澤俊夫君の『東京商科大学予科の精神と風土³』という本を如水会が推薦したりしてますね。

(渡辺) ああいうものをテキストにして、学園史の講座みたいなものを行っているんです。

(本間) 彼は私のところにも聞き取りに来ました。4年後輩の人です。

(渡辺) 先生は、予科に入ったときには寮に入っていたんですか。

(本間) 寮に入りました。小平にあった一橋寮です。

(渡辺) 4人部屋で。

(本間) いや、1年生のときは北寮の6人部屋にいました。原則として、北寮が6人、中寮が4人、南寮は向かい合わせの小さい部屋二つを4人で使うという変な配置でした。僕は2年のときは中寮の2階、そして3年になったら南寮に移るはずだったのが、一橋寮は

³ 大澤俊夫『東京商科大学予科の精神と風土』(2005年)。

陸軍通信部隊に明け渡すことになって、2年から3年になる境目の昭和19年3月31日に、国立の一橋寮に引っ越してそこで半年。結局僕は予科の2年半を寮で暮らしたわけですが、2年目以降は部屋長として残留したわけです。

(渡辺) 部屋長だからですか。

(本間) そう、部屋長としてです。この部屋長というしきたりは、石神井時代以来の伝統らしいんだけど、一橋寮の伝統の継承という点で重要な意味を持っていると思います。部屋長は特別の権限を持っているわけではないんだけど、部屋っ子に読書の案内をしたり、学問上の疑問に対してそれなりに対応したり、時には議論を仕掛けたりして、新入生の成長を助ける役割を果たしている場合が多い。むろん部屋長の個性によって部屋の空気もかなり左右されるわけだけど。実際、部屋長の学問に打ち込む姿勢に感銘してやる気になったと述懐する寮生は少なくないです。

この部屋長たちの中から選ばれる執行部が、一年生寮生の中から次の年度に部屋長として残る者を決めるんです。だから残寮を希望すれば誰でも残れるというわけではありません。

(大月) その寮なのですが、部屋長の上級生の方と、その新入生だか下級生の方とで、何か勉強会をなさったようなことをお聞きしているのですが。

(本間) 寮で勉強するといえば、まず部屋長のイニシアチブで適当な本をとり上げて随時やられていた読書会でしょう。部屋長の考え次第で何もやらないところもありますが。

(大月) 哲学研究会とか、歴史研究会。

(本間) それはおそらく、報国団〔旧一橋会〕の文化部の中に設けられていた研究班のことかと思います。今でいう部活ですね。そこに、哲学、史学、経済学、文学、法律、芸術などの研究班があって、それぞれに指導教官がつくことになっていました。学生は原則としてどれかの班に入らなければならないことになっていたから、プロゼミみたいなものでしょう。ところが、これらの研究班は、学年の区別なく、1年生から3年生まで一緒にやることになっているはずなのに、私の記憶では1年生だけでやっていて、そして1年生は大体みな寮生ですから、寮でやってる研究会と思っただとしても不自然ではないし、あるいは実際にそうだったのかもしれませんが。その辺がどうも曖昧なんですけど、これらの研究班で使われていたテキストで、哲学、経済、歴史についてはよく覚えています。哲学ではジンメル『生の哲学』とカント『実践理性批判』、経済学ではそのころ翻訳の出たゾンバルト

『三つの経済学』のグループとマーシャル『経済学入門』のグループ。歴史はランプレヒト『歴史的思考入門』。私は哲研に入っていました。

(西沢保) 年表に「昭和 17 年度予科の願書の受付が 1,633 名、ほかに外国人 12 名」とあるんですけど、1,633 人のうち何人ぐらいが受かったんでしょうか。

(本間) 入学定員が確か 250 人だったと思いますが、実際に合格したのは 260 人あまりです。6 倍くらいですかね。

(西沢) ほかに外国人 12 名とありますが、この外国人とは？

(本間) それがよくわかりません。しかし、あえて推測しますと、これは留学生として合格した者の人数ではなくて、留学志望者の数ではないかと思います。実際に入学したのは中国からの 5 名、これは名前を見ただけですぐわかります。ほかに朝鮮と台湾出身の合格者がなん人もいますが、彼らは「創氏改名」の植民地政策に従って日本式の名前を名乗っていますから、すぐには見分けが付きません。しかし、彼らが留学生ではなく、日本人と同じ入学試験を受けて入ってきたに違いないと推定できる出来事が最近あったのです。

私と同じ学年に竹山誠一という台湾出身の学生がいました。彼は寮でもずっと一緒だったし、戦後の学生運動でもいろいろ手伝ってくれた友人でしたが、昭和 21 年の正月早々に最初の交換船で帰国しました。台湾人としての本名は莊頭仁といますが、戦争が終わるまでその名前は誰にも話していなかったようです。帰国してからは台北銀行に就職して将来を嘱望されていたようですが、30 年ほど前に交通事故で亡くなっています。この莊頭仁の奥さんが、最近、夫の在学証明書の発給を大学に申請したところ、本学に在学した学生の中にそのような名前のもはいないといわれたのだが、在学を証明できるような資料が何かないものだろうかという話が、伝手をたどって私のところに回ってきたんです。そこで、彼のクラスの最近の名簿⁴ その他いくつかの資料を送ってあげたということなんです。この件で私がひっかかるのは、当時植民地であった朝鮮、台湾から来た学生については、その本籍地の本名が何ひとつ大学の記録に残っていないという点です。入学に当たっても戸籍謄本のような書類を提出する必要はなかったのでしょうか。これは、日本人と同じような名前の受験生を、日本人と同じ手続きで入学させたということでしょう。だから彼らは留学生の扱いではなかったと考えるわけです。

ちょっと余談になりました。それでは寮の話に戻しましょう。予科の寮がはじめて新入生を受け入れたのは確か昭和 11 年で、その後食堂も立派なものになり、読書室、集会室、

⁴ 「物故者」の欄に莊頭仁の名前と死亡年月日、遺族の住所氏名も記載されている。

娯楽室、医務室などが増築されて、われわれが入ったときの状態にまで出来上がったのが、昭和 13 年だと聞いています。建材はベニヤやスレートなどとお粗末なものだったけれど、割と合理的にできていて、何となくスマートな感じでしたね。いわゆるバラック建築という感じではなかった。調理場の片隅で、マーキュリーのマークの入った洋銀製と思われるスプーンとフォークを 5、6 個見つけたことがありましたが、寮の門出に当たっての意気込みのようなものを感じましたね。

(渡辺) これは戦災には遭ったんですか。

(本間) 空襲で焼けたんですが、その辺のいきさつも含めて、一橋寮がたどった苦難の歴史を簡単に話しておきましょう。まず昭和 19 年 2 月、私たち 2 年生が静岡県方面の勤労動員から帰ってまもなく、予科の本館が軍に引き渡されて、以後授業も事務も国立校舎でやることになったんですが、その翌月、寮も陸軍の通信部隊に明け渡して、国立に用意されていた新寮に移ることになったわけです。それで 3 月 31 日、隊伍を組んで小平から国立まで歩いたんですが、この時点で小平のキャンパスはすべて大学の手を離れてしまったわけです。

その引越しの前夜には津田のメッセンが十数名、予科グラウンドの西南隅のあたりまでやってきて「蛍の光」などを歌って別れを惜しんでくれた上に、当日は玉川上水にかかる橋のたもとで手を振って見送ってくれるというエピソードもありました。

僕が寮に入ったときには相当に伝統のある寮だと思ったんですが、振り返ってみるとわずか 8 年ほどで終わりを告げたわけですね。

先ほど三寮の部屋の定員をお話しましたが、部屋の数は、北寮 19、中寮 21、南寮が 20 で、合計すると 278 名なんですが、上級生が部屋長として各部屋に一人入りますから、新入生が入れたのは 220 人ぐらいということになりますね。

(西沢) そうするとほぼ全寮制ですか。

(本間) 一応、建前は 1 年生は全寮制なんだけど、今言ったように、上級生が 60 人残留するわけですから、入寮できる新入生の数がそれだけ減らされるということで、1 年生の全寮制という建前は崩れているわけです。しかし、入りたくない人、あるいは何か都合があって入れない人もいて、希望すれば何とかは入れたのではないのでしょうか。

(渡辺) ところが昭和 15 年予科入学の宮崎犀一は入れなかったとあって、後々まで残念がっていました。

(本間) そうですか。

(渡辺) ええ。彼は立川出身ですから、地元だからということではねられたと。「僕は入りたかったのに入れなかった」と言っていましたけどね。

(本間) 関恒義は、歓迎ストームで小便を飲まされたそうで (笑)、こんなところにいられるかといって、早々に退寮しちゃった。

(渡辺) この寮も建物は清水建設が作ったんですか。

(本間) それは知らない。施設課へ行けば、何か資料があると思うけど。

(渡辺) 丸便所とか、昔の学生食堂は清水建設が建てたようで、清水建設に行くとききれいな写真が残っているんです。このあいだ、田崎〔宣義〕さんがそれ見つけてきて・・・

(本間) それは国立の校舎のことでしょう。小平の寮はまったく別の建築様式だから。国立の建物の設計は、聖路加病院なんかやった、あの有名な・・・

(大月) 伊東忠太。

(渡辺) 予科も？

(本間) 予科は違うと思うけどね。伊東忠太の好きな妖怪も、予科の建物にはありませんしね。

(大月) あそこの入口に。

(渡辺) そう。でも図書館本館は文部省が造ったらしいんです。だけど伊東忠太に合わせて作ったから、当時の文部省というのはかなりそういう面では予算も潤沢だったらしい。

(本間) 僕のクラスの文集に書いておいたんですが、これをヒトツバシ寮とは絶対に言わなかったですね。イッキョウ寮です。昔は、ほかのものも全部、イッキョウだった。たとえば、一橋会、一橋新聞、一橋精神、一橋の伝統とか、みなイッキョウです。新制のヒトツバシ大学になってから、あちこちでヒトツバシという言い方になりましたが。

(渡辺) それは何か意図があるんですか。

(本間) いや、意図などないと思いますよ。昔からの慣習でしょう。

(渡辺) たとえば一橋家と区別するとか。時々聞かれるんですよ、一橋家と関係があるんですかと。

(本間) それはないと思う。イッキョウのほうが音感がいいのでしょうね。

たまたま発祥の地が神田の一ツ橋だったからで、それは東京工大が「蔵前」と呼ばれるのと同じようなことではないのかね。

先ほど、予科の修業年限が半年短縮されて2年半になったといいましたが、修業年限の短縮はすでに前年の16年から始まっていて、そのときは3か月の短縮。本科とあわせて5年9か月ですからこの年には3月と12月と2度卒業式があったわけで、水田さんは確か16年後期卒でしょう。それが僕たちのときに6か月短縮で本科と合わせて5年半。そして次の18年入学の人は1年短縮で、予科は2年、本科3年で合わせて5年となるわけです。そうすると、われわれより1年先輩の人は21年12月卒、われわれが22年9月、1年後輩が23年3月卒となって、1年3か月の間に3学年分の学生が卒業してゆくはずなんだが、この年代は兵役についた者が多いから、復員が遅くなったりすると後の者が先に卒業したりすることになる。現に僕のクラスの場合、順調に行って昭和22年9月に卒業できたのは34名中11名、23年卒が19名、一番遅い人は28年卒という具合で、だからわれわれの場合、卒業年次を起点にして何十周年記念というような集まりを持つわけにはいかないんです。クラス会も合同クラス会も昭和17年予科入学〇〇会で集まらざるを得ないというわけ。これも戦争のおかげです。

(西沢) 大体どういう方がいらしたんでしょうか。

(本間) ここに『一橋会会員名簿』という小さい冊子があります。この18年度版には専門部と予科の分しか載っていませんが、17年度版には本科の分も入っていてもっと分厚かったんですがね。僕のクラスで皆さんがご存じなのは、日銀総裁だった速水優、昨年亡くなった川勝堅二、彼は三和銀行の頭取でした。高島ゼミの出身です。ほかには皆さんのご存知の人はあまりいないかもしれませんが、同じ学年のほかのクラスにもいるでしょう。変わったところでは俳優の久米明とか。

僕たちが卒業した昭和22、23年あたりはまだ戦後のごたごたが続いていた時期ですから、求人状況などどうだったんでしょうね。商大出身者の多い三井物産とか日銀などにはかなり入っていますが。まだ正規の採用を始めていないところもあつたりで、二流どころの企

業に入ったものも少なくなかったように思います。

この名簿には、一橋会の会員ということで教員の名前も全部載っていますから、なかなか役に立ちますね。

(渡辺) これはうちにはないですね。

(本間) 大学にないですか。

(渡辺) ないです。

(本間) 今では持っている人は少ないでしょうね。実は17年度版も持っていたんですが、何年か前に如水会に寄付したんです。この間、借り出そうとしたら、紛失したらしいというんですね。

(大月) 如水会報にそういう資料をと呼びかけて・・・

(本間) そう、その呼びかけに応じて持っていったのに。丁寧に探してもらえばどこかに入っているかもしれませんね。

(渡辺) 今、こういうものは個人情報で作れないんです。

(本間) 作れないというか、作らないんでしょう(笑)。

(渡辺) 作らない。だから余計にわからなくなっちゃうのね。こういうものがあると見やすい。これは、すごいですね

(本間) それでは、小平の一橋寮のことでもう少し補足しておきましょう。寮の中での生活はまったく自由で何の制約もなかったといっていると思いますが、ただ食糧事情が、昭和16年から17年くらいまではかなりよかったのが、多くの人の話では18年からはたっと落ちたようですね。当時寮には食事部というのがあって、コックの監督なども寮生に任されていました。僕も一時、食堂部長というのをやったことがあります。調理場の壁一面にラードの入った縦横20～30センチくらいの箱が積み上げてあったり、近辺のある農家に残飯を運んで、豚を1頭飼育してもらったりと、当時としてはかなり贅沢なことですね。年に1回か2回この豚を夜中にこっそり屠殺して、大晩餐会を開くんです。コック長も腕を振るう機会が来たと喜ぶし、招待された寮監の先生方もご満悦、というわけです。当時

は米は配給制で、寮生もみんな配給手帳を提出してたんですが、どうやりくりしてたのか、ご飯や味噌汁は食べ放題でした。

(大月) 先生、今の話は場所は東キャンパスですか、小平ですか。

(本間) 小平の話です、全部。私はほとんど小平の寮しか経験していないんです。国立の新しい寮へ移ってからは半年で学部へ行きましたから寮を出なければなりません。その半年も、大半は勤労働員で日野重工の工員住宅に入っていました。

(大月) この 1945 年 2 月 10 日の「専門部構内の一橋寮」というのはまた別物なんですか

(本間) どこですか。

(大月) 右側の年表の 1945 年 2 月 10 日の。

(本間) 「一橋寮焼失」ですか。

(大月) はい。それはまた別物ですか。

(渡辺) 専門部構内の一橋寮じゃないですか。

(本間) 先ほど小平の寮を軍隊に明け渡して「国立に用意してあった寮」に移ったと聞いていましたが、これがその引越し先となった寮です。今は東キャンパスとっているようですが、あそこにあった専門部の A ホールと呼ばれていた建物と体育館に多少手を入れて寮に転用したものです。この寮が今度は寮生の失火によって焼けてしまったんですが、それが 2 月 10 日の「一橋寮焼失」です。

(大月) これ、同じ年の 5 月 5 日に「陸軍に貸与していた小平の一橋寮が焼失」と。

(本間) それはわれわれが通信部隊に引き渡して出てきたあの寮が、空襲にやられたんです。

(大月) いずれも要するに寮は「一橋寮」とっていたということなんじゃないかな。

(本間) そういことです。ただし、この 2 代目の寮を寮生たちは国立一橋寮といって

ましたね。私たちがこの寮にいたのはわずかな間でしたから、あまり細かいことは憶えていません。1年、2年下の連中が、卒業何十週年記念とかで立派な文集を作っていますが、彼らにとってはここが「青春の里」になるわけですから、われわれが小平の寮に対して持っている思い入れに劣らぬくらい、この寮に愛着を持っているらしく、いろいろ調べ上げて、詳しいデータを載せています。これらの文集はおそらく図書館に寄贈してるはずですが、僕のクラスの東京商大予科入学60周年記念文集『紫想』も図書館に入っています。

この国立一橋寮について忘れがたい思い出をひとつお話ししましょう。

昭和18年10月の学徒出陣で、寮の総務〔全寮委員長〕の遠山興一も入隊することになったため、その後を私が引き継いだんですが、翌年3月、つまり国立新寮への移転を機に、佐藤紀久夫〔高島ゼミ、時事通信〕が総務になった。実は同じ構内にある専門部の本館にも、すでに軍の通信部隊が入っていたんですね。そして4月には新入寮生が入ってくる。本館と寮は目と鼻の先です。寮監の太田可夫教授は、こういう状況のもとで、歓迎ストームなどをやって大騒ぎになれば、大変なことになるかもしれないと心配したんですね。佐藤を呼んで、ストームは絶対やらないと約束せよときつく申し入れたので、佐藤はわかりましたといって引き下がったんですが、それは佐藤とベクさんとの約束であって、われわれが自然発生的にやる分には佐藤が責任を問われることもあるまいという連中がいて、ストームを敢行したわけです。その音を聞いたベクさんは、「佐藤、約束が違うぞ。佐藤はどこだ。佐藤はどこだ」と大声で連呼して寮の中を走りまわるといことがありました。

あとで聞いたところによると、お向かいの通信部隊からは何の反応もなかったばかりか、しばらくした後、兵隊たちが酒を飲んで大騒ぎして本館前の池に飛び込む者もいたそうです。ベクさんの心配は杞憂に終わったわけです。

この国立一橋寮も火事で焼けて、その後また多少の転変があったようですが、それは私の守備範囲を超えます。

(杉岳志) こちらの『一橋会会員名簿』の最初のところに籠城事件のときの声明などが掲載されていますが、折に触れてみんなで読んだりしたんですか。

(本間) いや、そんなことはありません。第一こんな名簿を後生大事に持っている者なんかいません。

(渡辺) これ、ここに写っているのは高島〔善哉〕さんじゃないですか。

(本間) それは昭和17年度の全寮生の集合写真で、予科校舎の中庭ですね。先生はちょうどその年から学生主事になられたので、最前列の真ん中に座っています。前のほうに座

っているのは大体が部屋長ですね。

(渡辺) 寮は空襲で焼けても校舎は残ったんですね。

(本間) そう、校舎は残ったんですが、学生不在に校舎です。もっともこの写真を写した時点では寮も残っています。小平のキャンパスには、いまプールや体育館、それにいろんな研究施設などが建っていますが、そのときに壊されたようですね。

(渡辺) ですから私が 1969 年に入学したときの校舎は、まさにこれだったんです。白いタイルで。

(本間) 戦時中、一時黒く塗ったんですよ。

(渡辺) あれは学園紛争のときに塗ったんです。

(本間) そうか。空襲に備えたわけではなかったのか。

(江夏由樹) 私が知っているのは、何か通称小平プリズンというのがありましたが、その建物はその前ですか。

(渡辺) 黒塗り。まったく黒塗りになっちゃって。昔というか、われわれが入ったときは白くて、正面玄関にあのマーキュリーのブロンズがかかっていたんです。大学紛争のときにあれは権威主義だ、ブロンズ像を落とせとって、まずあれを叩き落して、さらにその後、封鎖が解除された後かな、建物全体を漆喰で塗っちゃったわけです。漆喰だかモルタルだかで。それで全部黒になっちゃった。だから今のあの一昔前の黒い。

(本間) それは後で洗い流したでしょう？

(渡辺) いや、そのままずっと使って、最後は今の新しい・・・

(本間) いや、僕が戦後、もう 20 年ほど前になるかな、桐生に住む友人の奥さんが亭主のいた大学を見たいというのでこの夫婦を連れて案内したことがあるんですが、小平から国立まで。そのときは確か、白かったな。

(渡辺) 白かった？そうですか。

(本間) じゃあ、黒いままで壊されたのか、その辺はちょっと定かじゃないが (笑)。

(西沢) それも大学が建てたんですか。

(大月) いやいや、一橋会。

(本間) 一橋会ですかね。

(渡辺) 一橋会というのはユニークだな。

(大月) 生協というのはこの一橋会のアイデアで始めてできたということを・・・

(本間) 生協というか、消費組合というのがありますね。

(大月) それ、福田徳三の肝いりで作ったという話らしいですね。『一橋会雑誌』ってありますね。関一さんなんかもずいぶん寄稿していたと・・・

(本間) ぼんやりした記憶だけど、それはロバート・オーエンなどに始まるイギリスの消費組合運動のようなものを実践的に学ぼうという、部活動のようなものではなかったのかな。

(大月) 会長も学長なんですか。一橋報告団の会長・・・

(本間) もともと社団法人一橋会というのは特異な組織だと思います。現役の教官と全学生を、いわば打って一丸とする自治組織ですから、役員も教官と学生からほぼ同数出しています。そして会長には学長、予科会長には予科長。

(渡辺) 職員は入ってないんですね。

(本間) 入っていません。この一橋会が昭和16年2月に解散させられて報告団に衣替えするわけですが、中身はほとんど変わっていません。現にこの名簿にしても、中見出しは報国団となっているのに、表紙は一橋会会員名簿となっているでしょう。

(西沢) こういう名簿はどうして大学に残ってこなかったんでしょうね。

(本間) どうなんでしょうね。やっぱり一橋会が編集・発行したのだからですよ。その一橋会はずっと解散してるんだから。

(渡辺) それは資料があると思います。そういう制度があったとか。

(西沢) いえ、制度でなくて資料が。

(渡辺) その時々々の資料の価値を認めなかったのかね？

(本間) しかも何年ごろまで出ていたのかも確かじゃない。

(西沢) 岡先生は同期だったんですか。

(本間) 岡稔？

(西沢) ええ。

(本間) 同期です。

(西沢) この名簿だと、そういうふうになっていますね。同じクラスですか。

(本間) 同じクラスです。それに、ふたりとも、先ほどお話しした哲学研究会に入っていましたし、学部へ行ってからも、彼が入隊するまでは下宿も一緒でした。そのころの岡は新カント派のリッケルトに集中していましたね。

そのころ、というのは予科1年から2年のなかごろが一番勉強に集中できた時期で、それから後は、勤労働員の連続で、落ち着いて勉強できるような状態ではなかったですね。

不勉強の言い訳にするつもりはありませんが、客観的状況として、本来なら、予科で3年間勉強に専念できるはずだったのが、実際はその半分、予科本科あわせて5年半のところ、実際は正味約3年しか勉強に打ち込める時間がなかったということです。

そこで、不勉強の最大の要因であった勤労働員について簡単にお話しておきましょう。これは私の推測ですが、勤労働員というのは、まず文部省が各学校に対して動員先のメニューを示してその中から学校が選択するという方式ではなかったかと思う。当時、文部省は、商大は勤労働員の受け入れについて消極的だと見ていたらしくて、大学は何とかして

そのような評価を改めてもらおうとして、思い切って引き受けたのが北海道八雲の飛行場建設への参加だったのではないか。何しろ北海道へ1か月ですから、本州の大学ではなかなか引き受けるところはなかっただろうと思います。2年生と3年生の希望者50~60人が、「北海道派遣勤労報国隊」という物々しい名前ですね。八雲というのは函館本線で1時間ほどの内浦湾沿岸の小さな町ですが、そこに徳川農場という大きな原っぱがあって、ここに飛行場を作ろうというわけです。われわれがやらされたのは、海辺で砂を掘り出してそれをトラックに積み上げて工事現場まで運ぶという仕事で、これを毎日4,5回やりましたかね。ここには、シンガポールから連行されてきた英軍の捕虜が数百名いているんな作業をやらされていたらしい。彼らが横に隊列を組んで、哀しげな歌をうたいながらただ行ったり来たりして土を踏み均らしていた光景にはちょっと感慨を催しましたね。この北海道行きの勤労働員は文部省の受けがよかったらしく、翌年も次の学年が出かけていきました。

このとき北海道へ行かなかった者は、埼玉県の農村へ援農作業に出っていますが、秋にも引き続き出かけています。

1週間か10日間くらいの短期間のもは別にして、次に大きかったのは昭和19年のはじめに約1か月、静岡県 of 農村での農地の乾田化作業。このときは、袋井付近の3か村と、浜名湖の北方沿岸の3か村のふたつのグループに分かれたんですが、僕は浜名湖周辺のほうだった。乾田化というのは、田んぼに深さ1尺くらいの溝を何本も掘って、そこへ竹の筒を埋め込むと、この竹に沿って水が浜名湖に流れ出して田んぼの水分が抜けるということで、こうすると収穫量が上がったらしい。この作業はそれほどきついものではなかったのだが、これが終わった後にやらされたのが、蛇行している川を直線にして結ぶという、まあ河川の流域変更ですね。幅が7、8メートルくらい、深さが70~80センチくらい土を掘り下げて、その土を両岸へスコップでほうりあげる。これは大変な重労働でした。

その代わり、休憩時間には、あぜ地に大きな鉄の釜がすえられて、サツマイモの蒸し焼き、これは実においしかった。それにみかんで有名な三ヶ日村のあたりですから、みかんは食べ放題。

(大月) 今のお話で、ふたつきほど、皆さん駆りだされたときに、どういう場所におられたのですか。投宿先は学校ですか。

(本間) それは動員先によっていろいろです。北海道のときは、何かの作業所に使われていた建物でしょうか、がらんとした2階建ての建物の2階の板敷きの床に雑魚寝だったように記憶しています。夏の暑い時期で、蚊や蚤に悩まされました。

浜名湖周辺のときは、半数くらいはお寺の本堂の畳の部屋で、あとは農家に分宿でした。

(大月) そうですか。そうすると食事は民宿というか、現地の民家で振る舞われたり。

(本間) 民家に分宿の場合は当然そうなります。

(大月) 指令系統といいますか、学生の皆さんを動員しているのは陸軍、どこが・・・

(本間) それは文部省ですね。

(大月) 文部省が陸軍省からの命令で動かしていると、文部省が・・・

(本間) いや、北海道の場合は軍隊の指揮下に入ったけれど、それは現地での仕事の段取りについてのことで、宿舎に戻ってからのことには一切軍は口出ししませんでした。軍にとってはありがたい助っ人なんですからね。休みの日には川で泳いだり、お盆のときは、のど自慢大会で飛び入りで参加する者もいたり、結構楽しんでいましたね。

もうひとつ、長期間の勤労働員は日野重工業です。さっきお話したように、昭和 19 年 3 月に、小平の寮から国立一橋寮に引っ越すわけですが、このころには、閣議決定で勤労働員令というのが出ていて、通年動員、授業は禁止ということになっていましたから、引っ越したばかりの国立一橋寮に落ち着く暇もなしに、いきなり日野重工です。ここでは、舟艇用のエンジンと私は思っていたのですが、いや戦車のエンジンだという人もいて、はっきりしないが、そんなものを作っていました。

ここでは、おそらく動員学生を受け入れるために急いで準備したと思われるベニヤのバラック建ての宿舎に入りました。カレー粉で炒めたようなご飯をたびたび食べられた覚えがあります。

ここで 3 か月働いたところで予科修了、それに続いて本科入学者宣誓式。たまたま時を同じくして⁵、大学の名前が東京産業大学に改められたのは皮肉ですね。なぜなら、われわれはろくに勉強もしないで、「産業戦士」として工場で働いていたんだから。

このころになると、まだ召集令状の来ない少しばかりの学生が残っているだけだから、勤労働員もまとまった人数で出かけることもできず、自宅あるいは下宿から現地集合ということになります。学校側としても、学生の所在がよくつかめてないから、事実上、自由放任の状態ですね。学校に行っても学生の姿はほとんどありませんしね。

僕自身は、当時浅川⁶ に中島飛行機が地下工場を建設していたのを、見物がてら手伝いに行ったようなんだけど、はっきり記憶しているのは、途中グラマン機の機銃掃射で、あわ

⁵ 昭和 19 年 9 月。

⁶ 現在の高尾近辺。

てて民家の軒下に逃げ込んだことだけです。

ところがこの中島飛行機が、地下工場が手狭になったために本学の講堂と食堂に目をつけたのです。そして 19 年 12 月以降、講堂と食堂が戦闘機用エンジンの部品工場になり、ここが僕の勤労働員先になったというわけです。

中島飛行機というのは第 1 級の軍需工場で、三鷹や武蔵野にも工場があって、僕らが加工する材料のギアの鋳物は三鷹から回ってくるようになっていましたね。大体直径 10 センチ、厚さが 3 センチくらいの円盤のような鋳物をグラインダーという機械で磨いて、さらに放射線状に溝を彫っていくわけですが、それはシェーファとかいう機械だったか、2、3 種類の工作機械を使って仕上げるんだが、誤差が 10 分の 1 ミリ以下とかでなければならぬというので、なかなかうまくいかない。というのはこのギアをもっと大きなギアの周りに配置して出来上がりということになるんですが、それがなかなかうまくみ合わない。手作業でいろいろとり変えたりして何とか組み上げるというわけです。だから、これをどんどんお釈迦にすれば、だいぶ戦力が落ちるんだが、なんて考えたこともありました(笑)。とにかく、2、3 種類の工作機械の操作はだいぶうまくなりましたね。

こんなことで、われわれ学生は落ち着いて勉強できなかったのに対して、当時の若手の教授たちは、相次いで研究成果を世に問うていますね。それはそれぞれの主著ともいうべき力作だったと思います⁷。これはわれわれ学生にとっても、誇らしく、頼もしいことでした。今から考えると、戦争たけなわの昭和 10 年代半ばの時期は、一橋アカデミズムの方向が見えて来た、いわば文芸復興期とっていいのではないか。それは、白票事件を機に多くの年配教授が退いて、残された若手教授に一橋の学問的伝統の中心的担い手としての自覚を促したからではないかと思います。

(大月) 配属将校なんかは。

(本間) 当時の配属将校は佐野織平という陸軍大佐⁸ですが、この配属将校については、ぜひとも話しておきたい重要な事件があるんです。

それは予科に入学して半年くらいで、まだ学校の様子間よくわかっていない昭和 17 年秋のことですから、事件の全貌が十分にわかっているわけではありません。当時私が直接に見聞した限りでの話です。

⁷ 上原専祿『独逸中世史研究』昭和 17 年。高島善哉『経済社会学の根本問題』昭和 16 年。山田雄三『計画の経済理論』昭和 17 年。鬼頭仁三郎人『貨幣と利子の動態』昭和 17 年 6 月。中山伊知郎『発展過程の均衡分析』昭和 16 年。『経済一般理論』昭和 19 年。杉本栄一『理論経済学の基本問題』昭和 14 年。高橋泰蔵『貨幣的経済理論の新展開』昭和 16 年など。

⁸ あだ名は「山猿」。

事件のきっかけは、軍事教練の時のみんなの態度があまりにもだらしない⁹、もっと真面目にやったらどうだという、ある上級生の投書です。この投書を載せたのが、一橋新聞だったか寮報だったのかははっきり覚えていませんが、これを読んだ佐野大佐が、これでは軍事教練のときの自分の指導に問題があるように受け取られることを心配したらしく、「屠所に曳かれる羊のごとくとは何たることか」と大いに腹を立てて、次の教練の時間に「こんな大学はつぶそうと思えばいつでもつぶせる。自分の後ろには陸軍が控えているのだ。ボタン一つ押せばすぐにつぶせる」と恫喝的な発言をしたんですね。そこで今度は学生の方が憤慨して、「つぶせるものならつぶしてみろ」と反撃に出た、という事件です。

3年生は修業年限短縮で学部へ行っていたから、反撃を組織したリーダーは2年生の予科報告団〔一橋会予科会〕の幹事と寮の幹部たち、丸山宗衛、大岸嘉雄、雑賀一雄その他数名です¹⁰。予科の講堂に全予科生を集めて、山猿の暴言を糾弾する大会を開いたんですが、ちょっと趣向を加えて、それを模擬裁判の形でやった。壇上の真ん中に裁判官役が3人くらい並んで、片方に検事役の男が控えていたが、弁護人がいたかどうか覚えていません。当然「被告」は不在です。まず検事が問題の暴言に至るまでの経過を説明して、佐野織平大佐の言動は大学と学生にとって許すべからざるものであると糾弾すると、これに対し賛成意見を述べるものが一人か二人いて、裁判官が「佐野大佐はその暴言を取り消し謝罪せよ」というような判決を下すということで終わったように記憶しています。この企ては極秘裡に練り上げられ、われわれ1年生は見物人として動員されただけでした。

この大会で示された予科生の総意は教授会に申し入れたはずですが、教授会がどう対応したか聞いていません。

対米英戦争たけなわで軍国主義一色のあの時代に、こういう事件がありえたということは不思議なくらいで、首謀者たちは退学を覚悟の上だったようですが、何の処分もなく、佐野大佐は翌年にはもういなくなりました。

われわれは「山猿の舌禍事件」と呼んでいますが、これは一般のマスコミにはもちろん、一橋新聞でも一切報道されていません。ところで、佐野大佐という人も人間的にはなかなか面白い人物で、戦後ある学生が表敬訪問したところ、私も大学をいくつか回ったけれど、商大の学生が一番しっかりしていて面白かったと言っていたそうです。

(渡辺) それは何かで裏付けられますか。その投書というのがあったわけですね。きっかけですね

⁹ 草履、下駄履き、中にはわざわざ裸足の者もいたという。

¹⁰ 村上一郎『振りさけ見れば』1975年、而立書房によると、この学生大会を企てた人たちの中で平田清明が指導的な役割を果たしていたように書かれているが、平田はこの時点では学部生だったから、おもてにはまったく姿をみせていなかった。

(本間) そうです。

(渡辺) それは一橋会・・・

(本間) それは一橋新聞から・・・

(渡辺) その予科版？

(本間) でしょう、予科版。僕は予科版じゃないのを調べたんだけど、そこには載っていませんね。発端となった、教練の様子についての投書が載ったのは寮報かもしれないね。

(渡辺) 寮報？

(本間) うん。これは小さいタプロイド版でね。図書館で調べればわかるかもしれませんよ。

(渡辺) 寮報は持ってないんじゃないですか。一橋新聞の予科版だってそろってないですから、わかりませんが。一橋寮報、いや、聞いたことない。

(本間) 僕の同期生で、吉田節生という人がいますが、彼は在学中の新聞などをきちんと整理して保存してるので、もしかしたら寮報も持っているかも知れない。

(渡辺) じゃあ、ぜひ取り寄せて。

(本間) 一橋新聞と寮報、多分持っています。

(渡辺) 一橋新聞は復刻されていますけど、予科版もいくつかは復刻されて。

(本間) 吉田は国分寺に住んでいますから、いつでも連絡が取れますよ。

(西沢) 今、お元気なんですか。

(本間) 元気ですよ。ほかに相良〔重雄〕なんかも、話を聞けるんだけどな。

(渡辺) 相良さんね。

(本間) そう。彼は比較的早く復員してきて、戦後の学長公選制なども一緒にやりましたし、彼はいろんないざこざが起きたときには、主犯じゃないけど、助手みたいな形でよく顔を出すんですね(笑)。その相良が首謀者の一人として大きな役割を果たしたのは、如水寮創設のときです。「如水寮」といっても、皆さんにはなじみのない名前かと思いますが、これも当時の状況を理解する上で大変興味深い話だと思うので、ここで取り上げておきます。

これは終戦の年、昭和20年1月のことです。先ほど、兼松講堂と学部の学生食堂が中島飛行機の工場になったことを話しましたが、この第一軍需工廠を管轄する軍需省の部局が学部の本館に入ってきたんです。これじゃあ大学のキャンパスが全部軍に占拠されて、学生が立ち入ることもできなくなるんじゃないか。これでは一橋寮以来の学問的伝統が失われるという危機感から、キャンパスの中に学生の泊まりこめる場所を作ろうと考えたのが片平博という熱血漢で、これに相良と樋口光治が加わって、ひょうたん池の近くに建っていた学生集会所に柔道場¹¹の畳を運び込んだんです。その建物の写真はここにあります、2階に広い畳の部屋がひとつあるほかは全部床は板敷きで、大小あわせて20室くらいはあったと思います。風呂場や炊事場も付いていて、なかなかしっかりした建物でした。

彼ら3人はなかなか用意周到で、あらかじめ江口定条氏〔元満鉄副総裁、如水会の初代会長〕に意のあるところを訴えて大いに感銘を与え、全面的支持を取り付けていたんですね。如水寮という名前も氏の提案で、玄関に掲げた扁額の文字も氏の揮毫によるものです。片平たちの行動は実力行使による不法占拠のように見えたんですが、おそらくは江口氏の口添えもあって、大学当局の事実上の黙認を得ていたんだとおもいます。ですから、学生ではない経済研究所所員の小島清、小山路男、山本道雄なども入ってきました。住人ははじめ少なくとも50~60人はいたと思いますが召集で櫛の歯が欠けるように減っていった、私に召集令状が来た7月末の時点では、せいぜい20人位だったでしょう。後に学長になった蓼沼謙一もこの住人でした。

まったく自主的な運営ですから勝手に寝起きしていたわけですが、月に1度くらい、研究報告会をやりました。僕が覚えているのは、同じクラスの鷺内寿雄が大塚久雄の『近代欧州経済史序説』について報告したし、報告者の名前は忘れたがマックス・ウェーバーの『プロテスタントの倫理と資本主義の精神』についての報告も聞いたような気がする。私も「明治期の自由主義思想とナショナリズム」といったようなテーマだったと思いますが、一度報告した覚えがあります。

この如水寮は戦後初期の学園民主化運動の拠点ともなった、思い出深いところなんです

¹¹ 剣道場と一緒に有備館という建物の中にあった。

が、国立キャンパスの整備に伴って東キャンパスの隅っこに移設され、まもなく失火で焼けてしまいました。

先ほど名前を挙げた山本道雄という人は、如水寮の僕の部屋に入居してきたんですが、彼が「こんな本を読んでみたら」といって貸してくれたのが、日本資本主義に関するポポフの本¹²で、これが僕の最初に読んだマルクス主義的文献となりました。彼は戦後、大塚金之助が研究所の所長のときに人員整理で辞めた後国連職員として渡米し、しばらくして亡くなったんですが、僕には忘れがたい人です。

(西沢) それは何年ぐらいですか。

(本間) 如水寮に入っていたんですから、終戦の年、1945年です。

(渡辺) 昭和20年1月に如水寮ができるわけですね。それと同時にお入りになったわけですね。

(本間) そうです。そしてそれと同時に、勤労働員が中島飛行機の学内工場勤務になったわけですね。すぐそばの如水寮から通うわけだから、文字通りの職住近接です。

(西沢) そのころまではマルクスの本は。

(本間) 予科に入るまではマルクスのマの字も知らなかった。入ってからマルクスという名前は聞き覚えはあったけれど、マルクスの本など見たこともない。これがわれわれの年代の大きな特徴のひとつだと思うんです。

水田さんの頃はまだ本も自由に手に入ったし、マルクスをテーマに卒論を書いた人も少なくなかったようなんだけど、僕が予科に入ったころには、街の新刊本屋はもちろん、古本屋にもマルクスと名の付く本は一切ありません。そんな本を棚に並べていたら、すぐ警察に持っていかれますからね。図書館も建前上はそういう本は貸し出し禁止でしたしね。先輩の中には多少かじっていた人がいたかもしれませんが、どの部屋でもそういう本を見かけたことはなかった。

(西沢) その当時の学生の思想形成といいますか、それは何だったんでしょうか。

(本間) それはちょっと難しい問題ですね。マルクス主義の文献に触れることができた世代の場合、この思想に対して自分はどう立ち向かうのかという形で、つまりマルクス主

¹² コンスタンティン・ポポフ『日本資本主義発展史』。

義の思想を糧として自らの思想を形成するというケースが、かなり多かったように思うんですが、われわれの場合、それが無い。予科時代、読書といえばたいてい哲学や文学の本で、経済学や歴史などは授業で聞くだけというのが普通でした。もっとも、予科も3年生になると学部へ行けばいずれ経済学などやることになるんだから『国富論』でも読んでみようか、という者も出てきますがね。むしろ哲学や文学でも、人間の生き方物の考え方を学んで、それぞれの人生観や世界観を形成する糧にはなる。しかしそれを理論的に裏づけてひとつの体系にまとめるのは、予科2年半では無理です。

私の場合、軍国主義や国粹主義イデオロギーの圧倒的な支配下にあつて、そういうものからどうやって逃げるか、自由になるかという受動的な姿勢で思想の問題に関わっていった、といったらいいでしょうか。社会主義はおろか、民主主義という言葉さえタブーであった時代にあつて、人間として最低限守るべき価値とは何かを模索していたわけですが、いわば世間から隔離された狭い環境の中で、「自由を謳歌」できた小平のキャンパスは、「自由」ということの意味を考えさせてくれたと思います。それが思想といえるものかどうか怪しいんですが。

予科時代の先輩で、寮の主（ぬし）みたいな存在だった有馬文雄〔高島ゼミ、名城大学〕は予科ではもとより、学部へ行ってからも、読むものはドストエフスキーばかりといわれていたんですが、卒論も「ロシア文学の研究」だったと聞いています。また北海道出身のあるクラスメイトが1年生のときの夏休みに、実家に帰らず寮にこもって、トルストイの作品をほとんど読破したという話もありました。当時はこんな学生も少なくなかった。

僕は予科時代はジンメルなどのいわゆる生の哲学を読み漁っていましたが、こんなものは、戦後の左翼出版物の洪水の中で雲散霧消してしまったという感じです。

予科で高島さんは原論的な講義を「商業通論」という名前でやっていましたが、せいぜい、発展段階説の説明のところまでゾンバルトが出てくるという具合でした。

一橋は社会科学の殿堂とよく言われますが、そういわれて思い出すのは、予科入学のときの入寮面接の場面です。当時、予科では入試合格者に対して学生主事をはじめ数名の教授による面接が行われていたんですが、その面接室の隣に、一橋寮の幹部による「面接」の部屋が設けられていて、新入生はそこにも顔を出すようになっていましてね、入寮希望の有無などを聞いた後に、いろいろな質問をしてくるんですね。入学するまでにどんな本を読んでいたか、と訊かれて、漱石、出隆の『哲学以前』まではよかったんだが、倉田百三の『愛と認識の出発』と答えた途端に、「そういう甘っちょろいものを読んでいてはだめだ。この大学は社会科学の殿堂なんだから」というお説教で、しきりに「歴史的現実」を見よ、とっていましたね。そこで僕は、上級生にはこういう考えの人が多いのかと思っただんですが、実際にはそんなではなかった。しかしそれが主流ではあったんでしょうね。

これは思想形成と直接には関係ないんだけど、勉強しようという意欲を刺激したという意味では、大体月 1 回定期的に開かれていた全寮生大会が一定の役割を果たしていたように思います。全寮生大会というのは、本来生活自治体としての最高の意思決定機関であるわけですが、たとえば寮の運営をどうするかというような議題について討議したことはほとんどなくて、各自が自由に自分の勉強していること、考えていることを発表する場になっていたんです。時には部屋長がわけのわからんことを長々と話すこともあったし、時には討論になることもあったけれど、せいぜい5~6分くらいの簡単な発言が取りとめなく続くわけです。僕たち新入生は、あいつなかなか勉強してるじゃないか、俺もこういうところできちんと発言できるようになりたいものだ、と思いながら聞いているわけです。

どうも話が飛び飛びになって申し訳ないんですが、戦後のことにつなげるために、ここで終戦前後の私自身のことについてちょっと話すことにしましょう。

1945 年終戦間近の 7 月末、私のところにも、8 月 5 日に長野のある部隊に入営せよという召集令状が来たんです。それは、先ほどお話したように、如水寮から大学構内の中島飛行機の工場へ通っていたときです。戦後生まれの皆さんでもご存知と思いますが、徴兵適齢期一昔は満 20 歳だったと思いますがそのころは確か 18 歳になっていました—になると徴兵検査というのがあって、合格者は甲種、乙種、丙種に分けられ、乙種はさらに第 1、第 2、第 3 と 3 つに格付けされていたんです。このうち丙種は大体何らかの身体的障害があって、「合格」といっても大体戦力外なんですね。甲種はもちろん文句なしの適格者で、これが陸軍の正規の人員になるわけです。乙種というのは大体が補充兵で、それも第 2、第 3 となると適格性の程度が落ちるんですね。私はその第 3 乙種でした。それは結核の既往症のせいなんです、そういう病弱者にまで召集令状が来るというのは、戦局はすでに末期的なところに来ている証拠ですよ。あと 10 日で終戦という時です。だからこのころになると、50 人召集しても使いものにならない人間が何人か出ることを見込んで、あらかじめ水増しして 60 人くらい召集するわけです。僕はその水増しのほうに入れられて、すぐに帰ってよろしい、何なら一晩泊まっていてもいいといわれたんですが、それは遠慮して佐渡の実家に帰って、だから終戦の詔勅はそこで聞いたわけです。そこでしばらくぶらぶらして、確か 9 月に入ったころ、学校の様子はどうなっているか行ってみようと思って上京したんです。国立へ来てみたら、キャンパスは草がぼうぼう、中島飛行機が引き上げた後の兼松講堂や食堂もそのままほったらかしで、キャンパスは荒涼という感じでした。むろん授業はやっていません。大体学生の姿をほとんど見かけないんだから。事務に顔を出したら、戦時中の勤労働員に対する労賃が出ているというんですね。確か 60 円あまりだったと思いますが。あれはただ働きたと思っていましたから、まさに棚ぼたです。そこで僕はかねてから行きたいと思っていた十和田湖へ行って湖畔の宿で 3 泊、来し方行く末に思い

をめぐらしたというわけ。そして東京には戻らないで、秋田から羽越線経由で再び田舎に帰り、また改めて上京して如水寮にはいったのが9月の末か10月のはじめころと思います。が、まだ授業は開かれていませんでした。

このころになると、復員した学生がボツボツ登校してくるんだけど、キャンパスの様子にがっかりして、高瀬学長は何をしているんだ、こんな学長は退陣しろという要求が盛り上がり、3階の大教室を埋め尽くして廊下にまではみ出すほどの学生大会が開かれることになったわけです。私は、まず昔の一橋会とは違う学生だけの自治組織を作るのが先決だろうと考えて、その原案を提案したんだが、今そんなことをやってる場合かという声が圧倒的で、議題に取り上げてもらえないわけです。それでは当面の間、実行委員会方式で行こうということになりましてね、学生大会で実行委員を選んで、それが学生代表として教授会と交渉するという形になったわけです。当面の要求は学長退陣です。

ところが、たまたま大学通りで出会った杉本〔栄一〕さんが、「学長が辞めれば、次の学長をどうやって選ぶかが問題になる。そうすると教授会としても面倒なことになる。だから学長の選び方を議論するほうがいいんじゃないか」というんですね。それを聞いて、学長退陣はすでに既定のことになっているんだと判断して、それなら杉本さんのいわれることももっともだと考えて、交渉のテーマを「学生参加の学長公選制」に切り替えました。

学生側の実行委員は、当初は僕のほかに江口昌志、竹山誠一で、少し遅れて小檜山政弘、相良重雄といった顔ぶれでしたが、実際に教授陣との交渉に当たったのは実行委員長の僕にだれかもう一人という場合が多かったですね。対する教授会側は、山口茂、上原専禄、中山伊知郎、杉本栄一その他教授会の中心的メンバーが10人くらい毎回出てくるのには内心いささか恐縮しましたね。時に交渉が夜にかかって、場所をキャンパスのすぐ近くにあった山口さんのご自宅に移して話し合いを続けたこともありました。寒い夜でね、みんなオーバーを着込んだまま押しくら饅頭みたいにして、火の気のない部屋に上がりこんだものです。今ではちょっと考えられない話でしょう。われわれ実行委員会は先にお話した如水寮の一室を拠点にしていたんですが、教授会からの連絡係は、当時まだ講師か助教授であった小泉明で、しばしばわれわれの様子を見にやってきました。

とにかく教授の方々が、熱心に誠意を持ってわれわれに対応してくれたことは、一橋という学園のよき伝統のひとつの証だろうと思います。

さて、学長選挙の方法についてわれわが主張し、最終的に教授会も受け入れたのは、次のような方式です。1) まず学生が予備選挙で3名以内の学長候補を選ぶ（もしも3名に満たない場合は、教授会は3名になるまで候補者を追加することができる）。2) 上記の候補者について、教授会メンバーが投票し、その結果各候補者の得た票数（A）および教職員組合の管理の下に事務職員全員が投票し、その結果、各候補者の得た票数を一定の割合で圧

縮した票数（B）を合計した票数（A+B）が最も多かった候補者を学長当選者とする。

ちょっと分かりにくいかもしれませんが、要するに、学長選挙の最終段階の選挙には学生は参加しない。事務職員はそれに参加するけれども、教授会メンバーの数とのバランスを考えて、たとえば、事務職員の課長職とか係職以上とかの数にまで圧縮する。細かいことは忘れましたが、確か30票くらいを考えていたように思います。

翌1946（昭和21）年2月26日、教授会は「学長推薦規則」を定めて、学生の提案を受け入れたわけです。こうしてまもなく、学生の予備投票で上原、大塚の2教授が学長候補者に選ばれ、決選投票で上原専禄が学長になったわけですが、このときの選挙方式は、次の改選時に、教授会メンバーと事務職員で選ばれた候補者について、学生が拒否投票をする方式に改められたんですね。これは僕の卒業した後のことです。

この学生参加の選挙方式をめぐっては、学長選挙のたびに文部省との間で繰り返されたきわどいやり取りについては、皆さんのほうが詳しいでしょう。

現在、学長公選制どころか、全国の大学で学生自治会が残っているところさえほとんどないでしょう。一橋だけはまだ曲がりなりにも何とか学長選挙はやっているんでしょう？

（渡辺） 意向投票、否、意向投票じゃなく参考投票です、学生の場合は。今や、法人化でがらっと変わりましたから。

（本間） 法人化で変わった？でもわりあい最近まであったわけだ。

（渡辺） ただ、その前に普通の大学に変わるという例の事件がありました。

（西沢） 阿部〔謹也〕学長のとき。

（渡辺） 阿部さんのときに大きく変わりました。そこで本間先生たちが作ってくださった、三者構成自治に基づく、拒否権の付いた学生参加学長選挙方式は廃止されたんです。

（本間） そうですか。

（渡辺） 阿部さんで廃止になったのです。

（本間） それまでに、もうちょっとで学生拒否投票が成立しそうになったときもあったんですよね。そういう万が一のリスクを考えて・・・

(渡辺) 1回ありました。

(西沢) 今井先生だと思います。

(渡辺) あのときに伝家の宝刀が抜かれちゃったわけですね。

(本間) それで投票用紙を隠したとか何とかとかいうんでしょう。

(渡辺) そうですね、それは知らないけど。なんかやってこられたものの、都留〔重人〕さんのときから、文部省のほうが許さないと強硬に出て、それでメモを出せということになり、それ以来、廃止へ向けて検討しているとか、廃止しますとか、要するにメモの文言でぬりくりとかかわしながら、それでも徐々に追い詰められていったわけですね。前回と表現を微妙に変えるメモを文部省に毎回出しながらようやく発令をとるという流れの中で、今井さんの選挙のときに、学生の側が伝家の宝刀を抜いたということもあって、制度そのものがやはり問題だという危機感がどちらの側にも生まれたんじゃないでしょうか。それがとうとう阿部さんのところまで来て、制度そのものの廃止になったというのが大雑把な経緯です。

(本間) そうでしょうね、全国で唯一なものね。

いい忘れましたが、そのときの学園闘争は学長選挙の問題のほかに、もうひとつ、レア・プラン問題というのがありました。それは当時、ひとつの講義を1年間に毎週聴いて1単位、そして年間に履修すべき単位が32単位ということになっていたんですね。これじゃあ一つ一つの講義内容について十分に勉強することは到底できない。受講した講義の半分くらいはろくに勉強もしないでいい加減な答案を書いてそれで通ってる、これではだめだから、もっとがっちり勉強できるように履修単位を減らせという要求をしたわけです。具体的にいうと、24単位にと要求して確か26単位になったんだな。今は何単位ですか。

(渡辺) そこで減らせになっちゃうんですね。

(本間) 減らしたんです。

(渡辺) 今は増やせになる。

(本間) ほう。

(渡辺) しっかりと勉強させるために単位を増やせと、そういう話。

(本間) 一つ一つじっくりやったらね、1 単位、1 科目を取るだけだって本気でやったら大変ですよ。

(渡辺) その考え方というのは私たちの時代まで残っていて、ゼミさえしっかりやっていたらいいという雰囲気が支配的でした。要するに授業というのは、みんないい加減でもよろしいということだったんだけど、最近、とくに共通 1 次の時代からでしょうか、だんだん学生の気質も変わってきて、むしろきちんとメニューを作って学生に勉強させなきゃいけないということで、どんどん単位数が増えてきています。

(本間) そんな勉強じゃあまり勉強にならない。

(渡辺) そうなんです。

(本間) 私は予科のときは寮にいたでしょう。たとえば簿記の試験なんかの場合、簿記に詳しい者もいるわけで、どうも簿記は苦手だという連中がみんなそいつのところに集まって、事前の講習を受ける。簿記に詳しいやつが模範答案を作って、とにかくどんな問題が出されても、この通りに書いておけば絶対落とされることはない。それでパスしてるんだから、先生のほうも先生だけだね。

それで、単位を減らすことはできたんだけど、白票事件以後そろばんや習字はなくなったということなんだけど、新しい授業科目があまり増えていないんですね。そこでわれわれは新規にいくつかの科目を設置するよう要求して、ある程度の成果がありました。川崎巳三郎の「社会主義および社会運動」、この人はれっきとしたマル経学者ですが、共産党から選挙に出ることになったためか、あまり長続きしなかった。それから近藤康男の「協同組合論」、そして米川じゃない、ちょっと名前を思い出せないが「ロシア語」。

(渡辺) 米川正夫じゃないでしょう、あれは文学だから。

(本間) これは全然違う。

(渡辺) ロシア語だと金子・・・

(本間) 大塚さんが連れてきたんだよ。

(西沢) 金子先生と。

(渡辺) 金子さん、金子幸彦さん。

(本間) 金子さんだ。

(西沢) 中村先生。

(渡辺) 中村喜和さんですね。

(本間) それからもうひとつ何かあったな、そういう新しい科目をいくつか増やしました。その後廃止になったのもあるでしょうけどね。

(渡辺) 『社会主義および社会運動』は副島種典さん、私たちの学生時代に開講してて、非常勤でしたけどね。だから科目としては残っていたんですね。

(本間) そうですか。

(渡辺) 金子さんはずっといらっしゃったし、お弟子さんも育っていた。

(本間) そういう要求があそこはちゃんと通ったんですよ。

(西沢) それは、すみません、予科のころなんですか。

(渡辺) それは戦後でしょう。

(西沢) 戦後にそういうのは・・・

(本間) 今の話は学部に行ってからの戦後です。学長選挙のこともみんな戦後のことです。

(西沢) 旧制の時には単位数というのはどのくらいだったんですか。

(本間) 32 単位だったんです。それを 24 に減らすように要求して 26 単位に落ち着いたわけですね。

(西沢) そうですか。それは新制になってもですか。

(本間) それは知りません。僕は新制になる前、昭和 22 年に卒業してますから。

(渡辺) 新制は昭和 24 年からですね。

(本間) 24 年でしょう、新制が始まったのは。

(渡辺) だから先生はいらっしゃらないですね。

(本間) いないです。

(西沢) 先生のおっしゃる 1 つの単位が・・・

(江夏) 昔の 1 単位が 4 単位だとすると、掛ける 4 にすればだいたい合いますね。

(渡辺) そうですね。

(本間) 僕らの時代は単科大学ですから、経済とか、法律とか学部に分かれてないんですからね。

(西沢) 同じでしょう。

(渡辺) でも 30 科目で 120 単位です。今と同じだね。

(江夏) 私がここに着任したときは 144 単位だったんです。ちょっとそれは多いだろうというので 120 いくつかになったように記憶しています。

(大月) 今も 100 近く。

(江夏) 120 程度でしょうか。

(大月) それはそうですけど。

(江夏) 今は 144 ですか？

(大月) ゼミナールを含めて 144 です。設置基準は 128 なんですが・・・

(江夏) 大体昔は多いですね。

(大月) ですから授業としては減らす方向で、単位の実質化ということを先代、先々代ぐらいの学長ぐらいからおっしゃって。

(渡辺) この年表を見て面白いなと思ったのは、講演に何人かの方がいらしてね。

(本間) そうそう。

(渡辺) たとえば杉村広蔵さんなんか昭和 17 年にやってきますよね。白票事件で辞めたはずなのに、やはり呼ばれるとちゃんといらしてくださるのですね。

(本間) 三木清とかね。

(渡辺) そうそう、それでその後、三木清さんですよ。

(本間) 僕はそういう文化講演会のことはほとんど覚えてないんです。それはたぶん、そういう講演会はたいがい宣戦の詔勅奉戴日の奉読式とか天長節の拝賀式とかの後に続いて行われるので、こういう式典を欠席すると、その後の講演も聞かずじまいということになったのだと思います。宣戦の詔勅奉戴日というのは、米・英に対して宣戦を布告した昭和 16 年 12 月 8 日を忘れないために、毎月 8 日にその詔勅を読み上げる式典を催すというもので、何とか戦意を高揚させたいという東条英機内閣のアイデアですが、大学としては建前上何とか形を作っただけで、それにかこつけて学術的な話を聞かせる機会にしたということでしょう。

(渡辺) そういうときにこの杉村さんが呼ばれて講演をするわけですね。

(本間) 大詔奉戴日とは限りませんがね。たとえば、この年表には、安部能成や務台理作の時は、文化講演とか文化講義という形で、そういう式典と関係なしに行われていきますね。

(渡辺) こうやって拝見すると、もう作業、作業の連続ですね。

(本間) そうそう。

(渡辺) もう勤労働員ばかりで、いつ勉強をするんだろという状況ですね。

(本間) だからせめてこんなときを利用して、多少、文化的な話を聞かせてやろうということなんだろうね。

(渡辺) そうなんですね。

(江夏) いや、私、さっき、勤労働員などでいかにあんまり机に向かわなかったかというお話を聞いて、さらに、そこからそれこそ単位の質の話になると、昔の大学のイメージがよく分からなくなります。でも先生はやっぱり勉強をされている。

(渡辺) そういう中できっと勉強への憧れが生まれるんでしょうね。

(本間) 勤労働員も結構それなりに楽しい思い出にもなるんだけど、勉強しなければという気持ちだけはあったでしょうね。しかし時間が切れ切れになって、落ち着いて勉強できないですよ。勤労働員のないときでも、すぐに頭を切り替えて本を読むかという、どうしてもそういうわけにも行かないんだよね。

(渡辺) そういう中で先生の問題意識とか、あるいは学問への道へ進まれたその動機とかはどうやって出てきたんですか。

(本間) 僕は別にそういう学問の道に進もうと考えていたわけじゃなくて、卒業した後一応入社試験を受けたんですよ。当時は日本発送電といったかな、今は 9 つの電力会社に分割されていますけど。

(渡辺) 電産ですよ。

(本間) そう、その会社の労働組合が電産労組〔電気産業労働組合〕。当時、電産の賃金体系というのがきわめて模範的というか、労働者にとって望ましいシステムになっていた、というようなこともあったりして、一応そこを受けました。しかし面接試験で、電産型賃金のことをいろいろしゃべったせいか、あっさり失敗しました。

当時の学生は、だいたい半分ぐらいが社会党か、共産党支持です。だから就職試験で支持政党を聞かれる場合も少なくなかった。相良が言っていたんだが、そういう場合自由党とか民主党とかいったらいかん、うっかり自由党なんて答えると、こいつは共産党支持をカモフラージュしてるんじゃないかと怪しまれるから、社会党支持ぐらいにしておくのがいいと。相良は現に社会党と答えて旭硝子に入ったんだから間違いないでしょう。

(西沢) それは昭和 22 年か 23 年ぐらいなんですか。

(本間) そうです。

(西沢) 片山政権というのは何年ぐらいでした？社会党政権が一時期ありましたよね。

(本間) 片山政権は 22 年の 2.1 ストの後だね、確か。

(西沢) 先生の卒論というのは何だったんでしょうか。

(本間) ヒルファディングに関連した金融資本論です。というよりも、先にトラハテンベルグのヒルファディング批判を読んで、ヒルファディングに興味を持ったんです。僕は高島ゼミではそんなことはやらなかったんですが、あらためて『資本論』に戻って価値論などでまとめるにはもう時間がないということで、まあやつつけ仕事でしたね。学者、研究者の道に進もうとはっきり決めていたらこんないい加減なことはしなかったでしょうね。

確か昭和 21 年、本科 2 年のとき、緊急金融措置で、旧円封鎖というのがあって、親元からの送金が途絶えましてね。アルバイトでもして何とか生活費を稼がなければならないということになって、予備校で英語の先生をしたり、『人民新聞』というところで記者まがいのことをしたりした後、そのころ高円寺にあった全日本機器という全国組織の労働組合の書記局に入って、主に機関紙の編集をやりました。そんなことで、じっくり卒論に取り組めるような状況じゃなかったんです。

電産の入社試験に落ちた後、高島先生の了解を得て、特別研究生として残ったんですが、その時点でも、将来研究者になろうという目的意識はなかった。だから組合書記局の仕事を、それはそれで面白いということもあって、引き止められるままにずるずる続けていたところへ、誰が紹介したのか、政治経済研究所から声がかかってきたんですね。といっても、それは囑託のような形で、炭鉱国家管理の実態調査という石炭庁からの委託調査をやって欲しいということだったんですが、この仕事を僕のほかにもう二人、これも臨時の囑託の人が加わって 3 人でやりました。北海道の主要な炭鉱 4 つ (夕張、美唄、砂川、赤平) を、1 か月かけて調査したんですが、その調査の報告書も僕が書くことになって、これにま

たひと月あまり、これですっかり体調を崩して結核が再発、しばらく療養することになるんですが、こんな状態で特研究生を続けるのは気が引けるので、特研究生をやめました¹³。そして翌24年、この研究所の所員になったわけです。

(渡辺) 特研究生になると終わった後に何か書かなきゃいけないんじゃないですか。

(本間) いや、僕らのときはそういうことは要求されなかった。特研究生というのは修士とか博士といったタイトルとは関係がないので、もともとそういう義務はないのじゃないかな。その年度は確か定員が5名で、志望者が6名、ひとはみ出ることになるんですが、中の一人が、自分はそれほど経済的に困っているわけじゃないから辞退するといひましてね、結局全員合格で面接試験も形式的なものでしたね。大体、5人の中で学究の道に進もうと本気で考えていたのは岡くらいなもので、ほかはこれといって行く当てもないからしばらく腰掛けていようというような人だったような気がする。

(西沢) それで、政経にはいって、そっちのほうがよかったですか。

(本間) いや、よかったですというか、とにかく普通のサラリーマンと違った仕事で月給がもらえるからね。この研究所は戦前の国策研究所だった東亜研究所を引き継いで、終戦の翌年、中央労働委員会の委員長だった末広巖太郎が初代の所長になって、日本一の高給を払える研究所にすると公言して始めたそうなんですが、僕が入ったころは、早くもジリ貧が始まっていましたね。それでも私がここで働く気になったのには、個性的で面白い所員がたくさんいたということもありましたね。大友福男、中林賢二郎、秦玄龍、市川弘勝、上杉重二郎、重富健一といった人達ですが、研究所の縮小とともに、みんな大学教師に転職しています。

僕が辞めたのと入れ替わるようにして、北田芳治（高島ゼミ、東経大）が入ってきましたね。建物は小さくなったが、機能的にはずいぶん充実しましたね。それには彼の努力が大いに貢献していると思います。

(西沢) マルクスのマの字も知らなかった後、戦後マルクスに接する機会といいますか、それはどういうことだったのでしょうか。

(本間) 戦後、高島ゼミが正式に始まったのは、21年の4月からですね。当時、3年先輩の井出潤一郎という人がいまして、彼が高島先生のいわば助手みたいなことになってたんだと思います。山田秀雄や水田洋はまだ南方から帰ってきていませんね。多分この

¹³ 本間の言によると、これは勝手な思い込みで、実際にはもう1年籍はあったらしい。

井出さんのアイデアだったと思うんですが、まずはじめに、戦時中に刊行された見るべき著作を何冊か読んでみようということで、取り上げたのが、山田勝次郎『米と繭の経済構造』、山田盛太郎『日本経済の分析』、豊崎稔『日本機械工業の基礎構造』、大塚久雄『近代欧州経済史序説』、それに平野義太郎の『日本資本主義社会の機構』も入っていたかもしれません。こういう本をそれぞれに報告者を決めて読んだあと、2学期の半ばを過ぎたころに、もうそろそろマルクスの『経済学批判』でもいいだろうということになったんですね。僕が最初の報告者になったので、あの時はかなり気合が入りました。確か、マルクスがここで価値といているのは、実体的な概念というよりもむしろ関係概念ではないか、というようなことをいって、それは面白い考えだというような先生のコメントをいただいた記憶があります。

(西沢) それは何年ぐらいでしたか、それは22年でした？21年。

(本間) だから21年4月以降。

(渡辺) 再開して1年目は戦中の良書を読んで。

(本間) そうそう。

(渡辺) その翌年だから22年4月ですね。

(本間) いや1年かからなかったかもしれないね。ひと月に1冊ぐらいずつ読んでいったわけだからね。

(渡辺) そのときの印象はどうでしたか、マルクスを読んだときに目からうろことか、衝撃が走るとか。

(本間) 普通の経済学入門書みたいなのは2, 3読んでいましたが、どうもピンとこなかった。それに比べてマルクスの文章はすっと胸に落ちる感じでしたね。感受性が鈍いのか、「衝撃が走る」というほどではなかったけど。しかし、僕は先ほどお話したポポフの本を読んでいたこともあるし、ゼミで山田盛太郎の『分析』などを取り上げたこともあって、講座派と労農派のいわゆる日本資本主義論争に興味を持っていて、そのほうの文献を多く読んでいました。だから理論からというよりは資本主義の実態分析みたいなところから入ったんですね。それは戦後改革の方向をどうするかという差し迫った実践的課題に直結していたということがありましたからね。そうするうちに、やはり理論的武器を鍛えな

ければということですね。

(西沢) 『経済学批判』の翻訳は買えたんですか。

(本間) 出てたはずですね。ゼミのテキストに使ったんだから。戦後には、原書で読ませるなんてことは先生は要求しませんでしたね。今の学生じゃ無理だと思ったんじゃないですか。

(西沢) でも、そのマルクスが、学生なり先生方の間で非常に強い影響力を持っていくようになる背景とといいますか、理由というのは何だったのでしょうか。

(本間) それはやっぱり戦後の高揚した革命的雰囲気ですよ。それはもう今の学生にはちょっと実感できないでしょうね。当時の一万田という日銀総裁が、私の子供の世代では無理だとしても孫の世代には間違いなく社会主義になる、と公言してはばからない、そういう情勢だったんだから。

そういう空気の中で、数人の左翼学生が中心になって、民主主義科学研究会というのを立ち上げたんです。はじめ社会主義科学にしようかと思ったんですが、もう少し穏健な感じのほうがいいだろうということで。通称「民研」。これは民主主義科学者協会とは違いますよ。

(渡辺) 民科ではないですね。

(本間) 民科じゃない。民研というのは、だいたい共産党シンパみたいなのが集まっていたんですが、共産党とは組織的には何の関係もないんです。これは忘れもしない22年の2.1ストの直後、1年後輩の2人の学生が、共産党細胞の名前で「声明」を張り出したんです。名前は知っていたが、民研には入っていない学生です。声明の趣旨は、GHQによる2.1ストの禁止で、アメリカ進駐軍がアメリカ帝国主義の日本支配のための手先であることが明らかになった、というものなんですね。しかし、当時の日本共産党は、進駐軍は日本の民主化を進める解放軍だと考えていましたから、民研の中には、この商大細胞の声明はちょっとずれているじゃないかと心配して、これをきっかけに共産党に入ったものもいましたね。

(西沢) 民研の主要な方というのはどういう人なのでしょうか。

(本間) 荏澤忠雄、醍醐一成、茂木健二、佐藤定幸その他。津田や東女の社研をオルグ

したり、指導したりする役目は岡稔、宮崎犀一などが担当していましたが、僕も一度だけ津田にいったことがあります。下級生もかなりいましたが、記憶が定かではないので、名前を挙げるのはやめておきます。全部で20名以上はいたでしょう。

(西沢) 経済理論学会の何か母体があつて。

(本間) いやいや、それとは関係ない。

(西沢) それと関係ない。

(本間) 経済理論学会ができるのはもっと後です。

(渡辺) アカデミックなものじゃないわけですよね。

(本間) 一応、主観的にはアカデミック。

(渡辺) アカデミック、でも学内・・・

(本間) ところが、学内の学生運動の中では、ほとんど圧倒的といっていいほど力を持っていましたね。たとえば、学生自治会の評議員の選挙でも、いわゆる民研派が多数を占めたようです。これは、僕の卒業したあとの23年ぐらいかと思いますが、弓削達が自治会の委員長になって、

(渡辺) 弓削さんね。

(本間) 彼が民研は横暴だとか、力を振るいすぎるといって、反民研派を結集して中道左派みたいな委員会を作るという情勢になつたらしい。そういうこともあつて、民研はひとまず解散し、たいていの大学にある社会科学研究会、いわゆる社研に衣替えしたということです。その後まもなく、新制大学に移行するわけですね。

(渡辺) その民研の伝統というか、そういう系譜というのはいったいどこから引き継がれ、そして、その後どういうふうになつたのでしょうか。

(本間) これは依光良馨さんから聞いた話ですが、大正の末期に、上田貞次郎を中心に発足したSPS(社会思想研究会)が徐々に左傾化して、依光、小泉明などの昭和10年

代に入ると、ほかにマルクス経済学の読書会とか唯物論研究会なども盛んにもたれるようになったそうで、中には検挙される者も出たということなのですが、こうした伝統は戦争で断ち切られて、われわれの学生時代には、そういう話はまったく聞いたこともなかったですね。だから、民研のような活動はそういう伝統を引き継いでいるわけではない。しかし、そのころの活動家だった岡田丈夫、平井潔、菅間正朔というような方々とは時々お会いする機会がありました。

後にどのように引き継がれたかということになると、さしあたり社研の活動状況でしょうが、これは僕の卒業した後のことで、よくわかりません。ただ自治会や寮執行部などには民研につながる者が多いようですね。

ここで1つの例として、昭和21年8月に第1回が始まった朝日討論会の出場メンバーを紹介しておきましょう。これは、全国の大学高専の学生が3人でチームを作って参加する討論大会ですが、いくつかの設問に対し、2つのチームがYESかNOの立場に分かれて討論し、その優劣を競うというものです。全国を8つの地区に分けて、トーナメント方式で予選をやり、勝ち残ったチームで全国大会をやるというもので、全国大会の様子はNHKで全国に放送されてちょっとした話題になったものです。参加したチームは200近くあったはずですよ。

その第1回のおきに出場したのは、荒川弘（成城大学）、岡稔、本間で、いずれも民研で、高島ゼミです。

（大月） 私は成城に勤めていたことがありますので、荒川先生は存じ上げています。懇意にさせていただきました。

（本間） 知っていましたか。

（大月） はい。

（本間） 荒川弘。

（大月） 産経新聞の論説委員を務められた。

（本間） そうそう。そのあと『潮流』という雑誌を出していた潮流社にいた時期もありましたね。

翌年の2回目の朝日討論会の出場者は、今村久米夫、佐藤定幸、高野好久。高野は、佐藤とともに世界経済研究所に入ったんですが、後に「赤旗」の編集部に移りました。今村と高野は高島ゼミです。3回目に出たのは伊東光晴、佐藤金三郎、二瓶一郎（新評論）の3

名だったと思います。伊東は杉本ゼミ、佐藤と二瓶は高島ゼミです。討論になると、どういふわけかマル経のほうが優勢になるんですね。ほかにもそういうチームが少なくなかったようで、マルクス主義の宣伝の場みたいになったんですね。朝日新聞もこれではまずいというので4回で打ち切ったんじゃないかな。

審査委員長が蟬山政道で、委員には羽仁五郎、細川嘉六とか、それから女性で何という名前だったか、そう坂西志保。ほかにもそうそうたるメンバーで、7人か9人いましたね。

(西沢) 先生のは昭和21年ですか、朝日討論会の。

(本間) そうです。

(西沢) そのときの討論のベースとなる内容は何だったんでしょうか。

(本間) それはマルキシズムですね。

(西沢) そのころすでにマルキシズムをこういうところで語っていたわけですね。

(本間) マルキシズムを語ったんじゃなくて、たとえば大学における宗教教育は是か非か、再軍備は是か非か、天皇制は是か非か、といったような論題が10くらい設定されていて、参加チームはあらかじめ賛否の立場を明らかにして討論に臨むわけです。そのときの立論の内容が、われわれの場合マルクス主義的な立場で考えてしまう、というわけです。

(西沢) それは別にマルクスじゃなくてもいいわけですね。

(本間) 無論マルクスでなくてもいい、何でもいい。要するに、聞いている人にこちらの言い分のほうが納得できると思ってもらえるかどうかです。ディベートの優劣はレトリックによってもかなり左右されますしね。

(渡辺) 先生に関心というのは、日本資本主義論争みたいなところにあつたというお話をされてましたね。

(本間) 理論的な勉強を始める前にね。できればそういうところから。

(渡辺) むしろ理論的なものよりも。

(本間) そっちのほうが先だった。

(渡辺) そういう論争的なもの、あるいは・・・

(本間) いや、「論争的」じゃなく、日本資本主義論争だからね。

(渡辺) そうか、日本資本主義をどう理解すべきかというそこに関心がある。

(本間) そう。それは戦争中、僕は漠然と反戦的な気分を持っていましたよね。あるいは厭戦的といってもいいかな。ところが、その戦争が日本資本主義の構造とどうつながっているかとか、そういうことにはまったく無知だったし、関心もなかったんです。

(渡辺) そこへ行かれたわけですね、それは分かるな。

(本間) 戦後の出発点なんですよ。

(西沢) 山田盛太郎なんかは、戦後すぐ大きな影響力を持つようになるんでしょうか。

(本間) いや、一橋ではあまり大きな影響力はなかったんじゃないでしょうか。山田門下生は東大に残らずに法政とか中央などに行く人が多かったですね。

(西沢) そうですか。

(本間) 東大では、正統派の横山正彦が頑張っていましたからね。しばらくしてからは宇野派のマルキストが多くなりましたね。

(西沢) 戦後、土地制度史学会ができるのは早かったですよね。たぶん・・・

(本間) 僕はこの学会には入ってなかったので詳しいことは分かりませんが、戦後農地改革という大きな変革がありましたからね。『農地改革顛末概要』という分厚い本がありますが、これなどもこの学会の会員たちの協力があったんじゃないでしょうか。マル経の研究者にとってもうひとつの拠点でしょうね。

(西沢) 先生の卒論の後、アカデミックな論文を書かれ始めたのはいつごろなのでしょうか。

(本間) 政治経済研究所では調査報告みたいなものが多かったんです。ドッジ・ラインとか特需の構造といったような時事的な問題についての解説的な小論文は書いていましたが、これらは学術論文といえるようなものではありません。アカデミックなといえる論文としては、大月書店から出した何という講座だったか、マルクス何とかという 6 巻くらいのシリーズのどこかに、「労働価値論をめぐる批判と反批判」という論文を書きましたが、これが最初じゃなかったですかね。

(西沢) それは何年ぐらいですか。

(本間) あれは政治経済研究所から信州大学に移った昭和 27 年ころですね。そのころ Rudolf Schlessinger, *Marx: His Time And Ours* という本の翻訳をやっていたんですが、その仕事を信州大学まで持ち越してしましましてね、ちょうどそのころだったと思います¹⁴。

(渡辺) そのころ、先生は、たとえば民科に入っていたということはないですか

(本間) 民科にはできたころに入りました。

(渡辺) 発足時から入っておられたわけですね。

(本間) ええ。確か政経研にいたころでしょう。あのころはマル経学者はたいてい経済学史学会に入っていたんですね。それが経済理論学会ができて、理論畑の人はほとんどみなそっちに移った。むろん、学史学会と両方入っている人もかなりいますが。

(西沢) 経済理論学会ができたのは、たぶん経済学史学会ができてから数年後ですね。

(本間) そう。だいぶ後ですね。

(西沢) その大月書店のマルクス経済学講座でしたか。

(本間) あのころは、「構造改革」路線をめぐる論争がにぎやかな時で、大月〔書店〕のあの本の執筆者の多くは、構造改革論者だった。だから僕の論文などは、ちょっと場違いという感じですね。

¹⁴ 同論文は「マルクス経済学の展開」(大月書店、1958年)『現代マルクス主義：一反省と展望』第2巻に所収。

(渡辺) 箱に入った3巻本みたいなやつ、このぐらいの薄い。

(本間) そうそう、3巻だったか5巻だか忘れたけど。

(渡辺) 井汲卓一、長洲一二さんなどが編集委員をされていた。

(本間) そうそう。

(渡辺) あれは昭和30年代の半ばじゃなかったかな。

(本間) そうでしたか。

(渡辺) ええ。

(本間) 政経研では、先ほど国家管理下の炭鉱の調査のことをお話しましたが、ほかには、農林省からの委託調査で、新潟の米作地帯で行われていた農地改良国営事業の経済効果とか、山梨県のある村落の果樹栽培農家の悉皆調査とか、そしてこれは近藤康男さんと二人で出かけたんですが、庄内平野の大地主に雇用されてる作男の調査¹⁵ など、こういう調査活動にはある程度習熟しましたが、学術論文といえるようなものは書いていません。

(渡辺) そういう点では、高島さんのその系列の中では非常に特異な経歴ですね。

(本間) ちょっと特異ですね。

(渡辺) 問題関心についてですよ。

(本間) そうそう。

(渡辺) それについて高島先生は何かおっしゃっていましたか。

(本間) いや、直接には何もおっしゃらなかったですが、高島さんには学史のほうでいろいろ優れた後継者がいるでしょう。理論関係では割合少ないんですけどね。高島さんは、後年になるにつれて理論的な研究が中心になってきてますね。そういうことから、むしろ

¹⁵ 潜在失業者問題の調査の一環として。

僕なんかの方に親近感があったのかもしれませんがね。

(渡辺) 理論志向ですよ、理論に対する憧れとか思いはすごく強い人でしょう。

(本間) そうなんだよね。だからはじめはアダム・スミスなんかやっていたのが、後の著作では、学史関係のものはほとんどやっていませんよね。

(渡辺) それでいながら佐藤金三郎さんみたいに、ああいう形で理論に行く人と、先生みたいに調査のほうで行く人と、やっぱり分かれていくんですね。

(本間) そういう点もありますね。

(西沢) 岡先生も理論派ですよ。

(本間) ええ。彼は経済研究所に入ってロシア部門をやるようになってからは、当然ロシア経済の現状分析もやることになるんですが、彼の主要な関心は社会主義経済の理論的分析なんですね。たとえば、社会主義のもとでの価値法則とか、社会主義経済における計画と市場とか。彼は本質的に理論志向の人間です。それは彼が1950年代に、再生産論、恐慌論、窮乏化論など資本主義の理論的分析で見た研究姿勢と基本的に一貫していると僕は思います。

(深沢) 佐藤金三郎さんも高島さんのところだったんですか。

(渡辺) そうそうたる方々がいっぱいいらっしゃいましたね。

(西沢) 佐藤定幸先生もそうでしたか？

(本間) 彼は高橋泰蔵ゼミでしたね。学生時代民研には入っていましたし、国立一橋寮では経済学研究会のリーダーなどをやっていたようですが、マルクスはあまり勉強してなかったと思います。彼は、理論は苦手だといっていましたから、世界経済研究所時代にも、マルクスの経済理論に立ち入ることはなかったでしょう。もちろん、『資本論』を読まなくてもアメリカ経済の研究はできるわけで、彼が映画や小説を通して子供のころから好きだったというアメリカを研究対象に選んだのは、ごく自然の成り行きだったと思いますよ。定年退官後も、イギリスの *The Economist* とアメリカの *Business Week* を自費で購読してるそうです。

(大月) また、ちょっと場所を変えて、もしよろしければお付き合いをいただいて。

(本間) そうですか、どうも大変まとまりのない話で。

(大月) 大変貴重な興味深い話をおありがとうございました。あっという間に 6 時 40 分になってしまいましたので、この辺りで場所を変えたほうがよろしいかと思えます。

(本間) 場所を変えてまたやるんですか。

(大月) いえいえ、のどを潤していただくという。

(渡辺) 一献差し上げようということです。

(本間) そうですか、それはどうも。

(大月) ありがとうございました。

<研究会終了>

「一紫会」関連ミニ年表 (1)

- 1933(昭和8)年
 8. 6 小平村に予科本館落成、九月から授業開始
 多摩湖鉄道に「商大予科前」駅設置され、開業(料金;国分寺～予科前・・・8銭)
 1936(昭和11)年
 4. 一橋寮、工事完成、開寮。「白票事件」起こる(2月～12月)
 1938(昭和13)年
 一橋寮、食堂・読書室などの増築工事了り
 1941(昭和16)年
 2. 11 「社団法人一橋会」を解散、一橋報国団を結成。予科、本科
 専門部順次それぞれの報国団を結成、九月には全一橋報国
 隊を結成
 10.18 東条英機内閣成立
 12. 8 ハワイ真珠湾空襲開始。米英両国に宣戦布告
 1942(昭和17)年
 3. 一 昭和17年度予科入学願書受付数 1633 名、ほかに外国人
 12 名
 4. 1 兼松講堂で新入学者宣誓式
 4. 8 対米英宣戦詔書奉読式を挙行(この「奉読式」はほとんど毎
 月、8日に行われた)、引きつづき上原専祿教授の「世界史
 的考察の立場」と題する講演
 4.17-18 神奈川県三崎方面へ「剛健徒歩旅行」
 4.18 零時30分頃帝都を中心とする京浜地区、中京地区、阪神
 地区等の各地に初空襲
 5. 5 予科報国団の総会が開かれ、「戦時学徒自戒5条」に対する宣
 言文」を発表
 5. 8 三科合同で兼松講堂において宣戦詔書奉読式を挙行、式後、
 杉村広蔵氏の「東亜における理想国家の問題」と題する講演
 6. 2 予科文化講演、安部能成の「時局と知識人」
 7.12-17 富士裾野板妻寮舎で野外教練
 10.18-21 習志野で野外教練
 10.27 滝山城址へ剛健徒歩旅行
 1943(昭和18)年
 4.30-5.3 陸軍被服廠へ勤労動員
 5.18-19 箱根方面へ剛健旅行
 本年度第一回文化講義、講師は東京文理大教授務台理作
 6.25 学徒戦時動員体制確立要綱を決定(本土防衛のため軍事訓練
 と勤労動員を徹底)
 8.10-9.10 北海道派遣勤労報国隊を組織、八雲町で陸軍飛行場建
 設工事
 9.23 文科系高等教育諸学校在学生の徴兵猶予を停止
 9.24-30 習志野で野外演習
 10.13 多摩御陵まで行軍(予科正門から約6里)
 10.20 兼松講堂で出陣学徒壮行会
 10.21 明治神宮外苑競技場で、文部省などの主催による「出陣学
 徒壮行会」。東京近在77校の学徒数万、雨中に劇的な分
 列行進
 (62ページにつづく)

一紫会関連ミニ年表 (2)

- 11.12 12月一日に入営すべき予科生徒に仮修了証書授与および
 壮行会
 11.13-22 埼玉県下の農家に分宿して援農作業
 1944(昭和19)年
 1. 6-2. 4 予科2年生は二つの班に分かれて静岡県で土地改
 良などの作業に出動(袋井付近の3ヵ町村と浜名湖北三
 の3ヵ町村)
 2.29 正午を期して予科本館を軍に引渡し、その後の授業・事
 務は学部で行う
 3.31 一橋寮を軍に明け渡し専門部Aホールに移転
 4.29 天長節拝賀式終了後、三木清の講演
 6.1-8.31 予科3年生は日野重工業kkに勤労動員
 9.17 修業年限6ヵ月短縮措置により、兼松講堂で予科修了式
 を挙行(修了者233名、うち18年度仮修了者87名)、
 つづいて本科入学者宣誓式
 9.26 官立経済大学官制が交付され、東京商科大学を東京産業
 大学と改称
 12. 1 兼松講堂および食堂など大学構内の一部を中島飛行機
 KK(第一軍需工廠)に貸与
 1945(昭和20)年
 1. 有志学生の創意により、学生集会所に畳を運び込んで如
 水寮をつくる
 2.10 専門部構内の一橋寮焼失
 3.10 東京大空襲
 4. 2 B29、中島飛行機武蔵野工場、立川市など東京都下を連
 日空襲
 5. 5 陸軍に貸与していた小平の一橋寮が焼失
 7. 6 米空軍機P51多数、立川飛行場を目標に来襲、内一機
 が低空で図書館に向けて機銃掃射、書庫・閲覧室に損害
 7. 8 米軍艦載機約50、立川飛行場に来襲、本学上空で反復
 攻撃、図書館時計塔などに損害
 8. 6 広島に原爆投下 8. 9 長崎に原爆投下
 8.15 「終戦の詔勅」の録音放送
 8.29 軍に接収されていた校舎、中島飛行機に貸与されてい
 た講堂などが返還される
 1946(昭和21)年
 2.26 前年末以来学生側「実行委員」と交渉をつづけてきた
 学長選挙の方式について、全学教授会は「学長推薦規則」
 を決定、学生参加の道を開く
 8.26 高瀬狂太郎学長退任、上原専祿学長就任
 1947(昭和22)年
 3.24 大学の名称が東京産業大学から東京商科大学に戻る
 1948(昭和23)年
 9.18-20 全学連結成、東大が会場貸与を拒否したため20日
 は兼松講堂を使用
 1949(昭和24)年
 1.19 上原学長退任、中山伊知郎学長就任
 5.31 総合大学として一橋大学発足

[資料] この年表の作成にはつぎの資料を参照した(本間)
 『一橋大学年譜1』、『東京商科大学事務時報』、『一橋新聞』等